

# 季節を告げる 年魚

春から初夏、幼期を過ごした海を離れ、川へと力強く戻ってゆく稚鮎。歯が櫛状に変化すると、清流の川床にある付着藻類をこそげとって食べるようになります。良好な餌場を独占するため、一部がなわばりを作り侵入者を攻撃する性質を利用して、おとりのアユで釣る“友釣り”は夏の風物詩。釣り上げられたばかりの艶やかなアユから放たれる爽やかな香りが、涼を届けます。夏が過ぎると、アユは黄金の婚姻色をまとい、背鰭後方の脂鰭にある橙色の帯が顕著に色づくため、ひときわ目を引くようになります。秋も深まり、産卵のために下流の浅瀬へと下り始める頃、その体色は黒く錆びたような風合いとなり、すっかり輝きを失います。鮎鮎と呼ばれる所以です。そして産卵を終えると、わずか一年の生涯を閉じます。およそ成魚とは似つかぬシラス型の仔魚は、海に流され冬を越し、春には銀色に輝く稚魚に成長します。

たった一度の季節の移ろいととも、次々に変化を遂げるアユの一生を儚いというべきでしょうか。私には、力強い命の輝きとともに自然の中でどう生きるべきかを教えられているように思えてなりません。

## アユの放流

アユは、東アジアの固有種。日本列島

神社では川中の大岩にアユを投げ入れて、その年の豊凶を占います。

古代、神前に供える饗と呼んでいたのがアユの発音に変化した、というように名前の由来には諸説ありますが、面白いのは地方名が少ないこと。古くから神事にかかわる魚として知られてきたことが、地方名を生まなかった理由でしょうか。島根県で発見された化石から、アユは約一〇〇〇万年前には既に存在していたことが明らかにされています。

## 爽やかな 香気とともに 味わう

天然アユの味や香りは、育った川によって違います。主な香気成分であるD-ノナジエンールのほか、ノネナールなど各種成分が組み合わさって、キュウリやスイカのような特有の香りとなります。この香りとともに味わうのがアユの醍醐味。美味しい食べ方は数えきれませんが、塩焼きにして蓼酢で食べるのが一番です。腸は抜かず、鰭が焼け落ちないようにたつぷり塩を付け、泳いでいるかのような踊り串を打って焼いたものを頭から丸ごと食べれば、爽やかな香気とともに上品な自身の味を存分に楽しめます。アユならではの伝統漁は今も各地に残ります。鵜を巧みに操る鵜飼漁は、岐阜県長良川のほか、山梨県や福岡県など多くの地域に点在します。鵜がくちばしで

のアユを中心に、奄美大島・沖縄のリュウキュウアユ（沖縄では既に絶滅したため奄美から移植）、中国・台湾の亜種も含め三亜種で構成されています。

日本列島のアユのうち、琵琶湖のアユは海に下らず川と湖を往復します。この湖産アユ、在来のアユに比べて小さいものの、なわばりを作る性質が強いことから釣りやすく、本来生息していないはずの全国各地に大正時代から繰り返し移植されてきました。そこで湖産アユから生まれた仔魚は塩分耐性をもたないため、海へ下ると死滅して再生産には寄与しません。湖産アユと在来のアユから生まれた交雑仔魚もまた然り。遺伝的な攪乱をもたらすところではなく、在来アユの再生産を阻害する懸念もあります。湖産アユに限らず、全国津々浦々の河川へさまざまな由来のアユの放流は百年以上にわたり行われてきました。こうした攪乱は、巡り巡って生態系に思わぬ重大な問題を引き起こす可能性があることを忘れてはいけません。

## 鮎で占う

鮎とはアユで占いをした故事に由来します。例えば日本書紀には、神功皇后が新羅を求めて三韓征伐に出る前に肥前の国に立ち寄り、川釣りをして勝負を占った際のエピソードが記されています。竿をあげるとアユが釣れていて、その後、望み通りに新羅の国を手に入れることができたのだとか。さて、こうした占いは現在も行われています。三重県の水戸神

捉えた瞬間にアユを締めるため、鮮度が保たれて美味！高知県四万十川や仁淀川に残る火振り漁とは、月明かりのない静かな闇夜、松明の火を振りアユをおどして網に誘い込むもの。ぐるりぐるりと振り回される松明の明かりが真っ暗な水面に映る様子は幻想的です。

グラバー図譜には画家・中村三郎が描いたアユが四図もあります。理由は「今と昔の長崎に遊ぶ」（九州大学出版会）の第十一章で分析したのでご参照ください。著名な歌人でもあった中村が、長崎県の湯江で一九一七年十月にアユを描いた頃に詠んだ短歌を見つけました。

遠つ背の音をさやけみ下り鮎  
い群れて下るけふのよき日に

中村は一九二二年に三十二歳の若さで亡くなりました。また、一九九七年の諫早湾締切りにより湯江周辺の川と海のつながりが断たれ、アユが育つ環境ももはや失われました。



解説 山口敦子  
長崎大学水産・環境科学総合研究科教授  
YAMAGUCHI Atsuko  
東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。2000年から長崎大学。専門はエイやサメなど魚類学と水産資源学の研究。主な著書に「干潟の海に生きる魚たちー有明海の豊かさの危機」（東海大学出版）など。

# Glover Atlas アユ

*Plecoglossus altivelis*  
画家 中村三郎

## グラバー図譜 日本西部及び南部魚類図譜

Fishes of Southern  
& Western Japan

グラバー図譜は一切の引用  
および転載を禁止しております。



長崎大学附属図書館のホームページでもご覧いただけます。

<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/GloverAtlas/>

「グラバー図譜」は、長崎の実業家であった倉場富三郎氏が編纂したコレクションです。日本四大魚譜の一つといわれています。